

The 49th Annual Meeting of Japanese Hip Society

第49回日本股関節学会学術集会

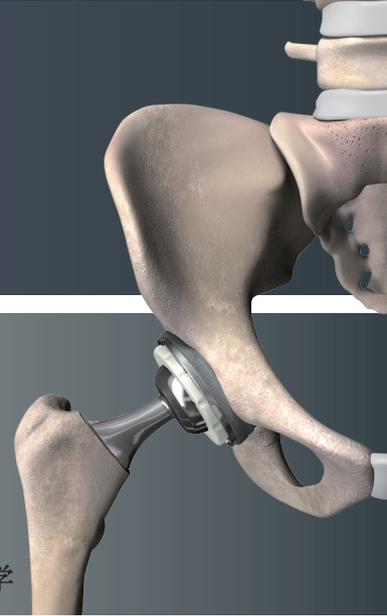
ランチョンセミナー7

# THAにおける「オフセット」

演者 **山村 在慶** 先生 大阪ろうさい病院 整形外科

## 進化するTHA — 今後、目指すべき方向性とは —

演者 **洲鎌 亮** 先生 大阪公立大学大学院 医学研究科 整形外科学



10月28日 **金** 12:05 ~ 13:05

座長 **青田 恵郎** 先生

星総合病院 股関節・人工股関節センター

会場 **第9会場** ホテルメトロポリタン山形

〒990-0039 山形県山形市香澄町1-1-1 4F 霞城A

申込

本セミナーは現地開催を予定しております。オンデマンド配信は  
ございません。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

<https://site2.convention.co.jp/49hip/>



認定単位

日整会専門医 認定単位 (N) 1 単位 \*

必須分野

[11] 骨盤・股関節疾患 \*

[Re] 運動器リハビリテーション医単位 \*

\* 現地の教育研修講演受講受付にてお申し込みとなります。

共催セミナーは整理券制ではございません。日整会単位の受講登録をされた先生から優先的にご入場いただけます。

## THAにおける「オフセット」

山村 在慶 先生 大阪ろうさい病院 整形外科

1976年Pauwelsは片脚起立時にかかる大腿骨頭への合力は体重の約3倍であると報告した。その結果は、「体の重心と骨頭中心の水平距離」や「骨頭中心と大腿骨軸間の距離 (femoral offset)」により大きく変化する。THAにおいても、その同時代にCharnleyはfemoral offsetを増加させれば股関節の可動域が増加し、インピンジメントのリスクを低減できることに言及している。1990年代になるとTHAにおけるfemoral offsetに関する研究が数多く実施され、femoral offsetが不十分であると、インピンジメント、脱臼、ライナーの摩耗、インプラントのゆるみのリスクは増大し、femoral offsetを増加させることによって股関節の可動域は増加し、股関節の外転筋力も増加し、歩行にも良い影響を与え、一方で過度のfemoral offsetは術後の疼痛に関与するなど報告されている。THAにおいてはfemoral offsetがその成績を左右する重要な因子であることは疑いようがない。しかしながら、バイオメカニクスに影響するはずの「体の重心と骨頭中心の水平距離」については論じ

られることが少なかった。2000年代の後半になると、「体の重心と骨頭中心の水平距離」も考慮したglobal offset (teardropと骨頭中心との水平距離にfemoral offsetを加えたもの) という概念が紹介された。まだまだ研究が少なく、acetabular offset、hip offset、cup offsetなどと用語も定まらない状態であり、global offsetをどのようにすべきかについては結論が得られていないため、そこに検討を加えたい。

さらに、三次元的にTHAの術前計画を実施することが多くなった現在において、単純X線両股正面像上で定義されたfemoral offsetやglobal offsetをどのように評価するかについてもコンセンサスが得られていないため、そこについても検討したい。

## 進化するTHA

— 今後、目指すべき方向性とは —

洲鎌 亮 先生 大阪公立大学大学院 医学研究科 整形外科

THAは、良好な長期成績を誇る優れた手術です。この点に疑問を呈する整形外科医師は、おそらくいないでしょう。では、これ以上の改善点は無いものでしょうか？

この問いに対する答えは、「No」と言えます。今も開発が続いている現状が、この答えのすべてと考えます。適切なインプラント設置と良好な初期固定性は、術者がTHAを施行する上で、最も意識すべき項目です。特に臼蓋側インプラントであるカップにおいては、これらの点での開発が著しいです。

カップ設置に術後成績が大きく依存しているため、THAは難しい手術と認識されています。しかし、ナビゲーションの登場により、カップ設置は、安心して行うことのできる手技となりました。正確なカップ設置を行うことにより、最大の懸念である脱臼を最小限にできる、ナビゲーションがTHAにもたらしてくれた恩恵は、計り知れないものと言えます。近年、普及し始めたRobotic Arm Assisted Surgeryは、このナビゲーションの精度をさらに高めていると報告されています。カップ設置の精度を高めるだけでなく、Robotic Armにより制動されたリーマーは、臼蓋の不

必要な掘削を行うことなく、カップ設置の準備ができます。これにより、初期固定性の向上も期待できると考えます。

初期固定性に目を移すと、カップ開発の歴史となります。Tridentは、術者にとって使用性に優れ、かつ、安定した臨床成績が報告されているストライカー社の主力のセメントレスカップです。その表面形状とハイドロキシアパタイト添加がもたらす優れた初期固定性と骨伝導性から、理論的にも良好な骨固着が期待でき、これまでに、短期的にも、長期的にも、良好な臨床成績が報告されています。今回、さらなる患者満足度の向上を目指し、Trident IIが市場導入されました。Tridentの過去の臨床データを整理するとともに、今までと異なった特長を持つTrident IIを分析し、その新たな可能性について探っていきたいと考えます。

今も進化し続けるTHA。私たち整形外科医師が、今、患者に提供できる最善の医療は何か。また、今後、THAが目指すべき方向性はどうか。これらについても、講演の中で触れたいと考えます。